

## 登場人物

### 山越 権太郎 (やまこし ごんたろう)

男。24歳。根来村青年団団長。

自棄になった村長の発案で巨根を売り出されることになる。

平常時 12.6cm、勃起時 28.8cm のずる剥けごん太チンポ。童貞。

### 根来 伝介 (ねごろ でんすけ)

男。64歳。根来村村長。

特産品が何一つない根来村の村おこしとして権太郎の巨根を宣伝することを思いつく。

### 御堂 康孝 (みどう やすたか)

男。32歳。根来村の青年。権太郎の兄貴分。

ネットワークツールに疎い伝助に代わり、権太郎の巨根の宣伝を担当する。

### 佐原 しずく (さはら しずく)

女。24歳。根来村出身。権太郎の婚約者。

仕事が殆どない根来村から出て、町で働いている。

### 二宮 徳之助 (にのみや とくのすけ)

男。年齢不詳。自称経営コンサルタント。

親族が事故に遭ったことで村を離れざるを得なくなった康孝に代わり、権太郎の巨根を売り出す。

## 第一話

「いいことを思いついたぞ！」

権太郎のデカチンを売り出せばいいのだ！」

根来村村長である根来伝助の突然の宣言に、山越権太郎は頭が真っ白になった。

伝助が錯乱したのではないかと発想する余地もないほどに衝撃的だったのだ。

ここは、120年前に建てられて以来、一度も大規模な手入れが行われていない根来村の寄り合い所だ。

壁のペンキは剥げてむき出しになった板はささくれ立っているし、ガタガタと風に揺れる窓枠を外から板を打ち付けて押さえたりと、対症療法しかできていないことが、その外観から明らかである。

寄り合い所に集まった村民たちは酒盛りをしているのではない。

過疎化が進む根来村の村おこしについて相談をしているところだったのだ。

根来村の過疎化は深刻である。

根来村出身の若者で村に在住しているのはわずか五名。

小学生が一人、高校生が二人、そして、村の青年団団長である権太郎と、権太郎より八つ年上の兄貴分である御堂康孝しかいない。

そして、高校生の二人は卒業後、この村を離れて都会の大学に通うことが決定しているので、近い将来、根来村の若者は権太郎を含めて三名まで減ることは確実なのだ。

それだけではない。

この村の大人たちも半数が出稼ぎのために村を離れている。

権太郎の父も長距離トラックの運転手として、今もどこかの高速道路を走っているだろう。

故郷である根来村への愛着を抜きに判断をするのなら、根来村の廃村は確実だろう。

そうなる前に、村民たちは、いや、権太郎はこの村を出て新しい生活を始めた方がよいだろう。

けれど、権太郎はそうしたいとは思わなかった。

権太郎は婚約者である佐原しずくとともに、この村で生きていきたいという夢を、まだ、捨てられないからだ。

繰り返しになるが、この集まりは過疎化が深刻な根来村の村おこしの相談をする集まりである。

それがどうして、権太郎のチンポの話になるのか、権太郎には分からない。

酒が入っているのならばともかく、素面での集まりでどうして突然、「権太郎のデカチンを売り出せばよいのだ！」になるのか、分からないし、分かりたくもない。

形ばかりの青年団団長であり、この集まりでは最年少である権太郎は、村長である伝助に真面目にやれ、と注意できるはずもない。

繰り返しになるが、この根来村は本当に崖っぷちなのだ。

農業が主要産業であるとはいえ、特産品と呼べる野菜は栽培していないし、都会で受けのよい無農薬栽培や有機栽培などについても、ノウハウもなければ行っただけの労力も足りな

い。

文化財として登録できるような建物や骨董品もなければ、観光客を呼べるだけの風光明媚な場所もない。

ないない尽くしな上に、若者を始めとした村民の流出が深刻で、大胆な改善を行うだけの活力も経済力もないのだ。

そんな根来村の村おこしを相談する場で、どうして「権太郎のデカチン」などという言葉が飛び出すのか、権太郎には理解できない。

「伝助さん、あんた、酔っぱらっているのかい？」

村民の一人が伝助を注意する。

「いいや、俺は正気だ」

だが、伝助は己を正気だと主張する。

権太郎にはとても正気には思えない。

「いいか、皆の者。」

この村はないない尽くしの村だ。

特産品もなければ、観光客を呼び込めるような文化財も風光明媚な場所もない。

活力もなければ経済力もないのだ。

この状況で、この根来村を売り出すとしたら、権太郎のデカチンぐらいしかないだろう。

なにしろ、権太郎のデカチンはこの村一番どころか、麓の町でも負け知らずだからなあ」

伝助の言葉に、村民たちが黙り込む。

権太郎にとっては与太話でしかないのに、伝助の言葉を否定してほしいのだが、村民たちが伝助の言葉を吟味してしまっている。

権太郎は、己のデカチンを自慢に思ったことはない。

村から麓の町まで一日二便しかないバスに乗って通っていた中学校時代、悪童たちにパンツ下ろしをされてデカチンが暴露されて以来、高校卒業までずっと「権太郎はデカチン」という評価がついて回って、デカチンをからかわれたり、何かにつけてデカチンを露出させられたりと、散々な目に遭ってきたのだ。

権太郎がデカチンということは女子生徒たちにも広まってしまい、陰でヒソヒソと囁かれるようになってしまったのは、甘酸っぱい青春なんてものも絶望的だ。

デカチンであることによって損ばかりしてきた権太郎にとって、デカチンは人生のハンデであって、自慢できるものではない。

そんなものを売り出すとか、とてもではないがやってられない。

「……まあ、確かに権太郎のデカチンぐらいしか、名物らしいものはないか」

「だが、チンポなんか、どうやって売り出せばいいのか。」

チンポなんぞ、男には皆ぶら下がっているから、珍しくもないだろう」

「だが、一考の余地はあるぞ。」

都会ではこの村にはない様々なものを売り買いしているという。

ならば、デカチンも需要があるのではないか？」

「そういうものか？」

村民たちの会話の流れが徐々に、権太郎のデカチンを売り出す方向に流れている。

村おこしのアイデアが浮かばず、浮かんだとしても実行に移すだけの活力と経済力がな

いことへの閉塞感に耐えかねて、何でもいいからやってみるか、というヤケッパチに向かっているのだろう。

「ちょっと待ってください！

チンポなんて、見せびらかしたってひんしゅくを買うだけでしょ！」

流石にデカチンを売り出す流れになるのは耐えきれないので、権太郎は村民たちの会話に割って入った。

「そりゃまあ、ただのチンポなら売り出しても無駄だろうが、権太郎のチンポは稀にみるデカチンだからなあ」

「どうせ、他に手もないわけだし、やるだけやってみればいいんじゃないか」

「他にできることもないしな」

だが、村民たちはないない尽くしの根来村の将来について考えることに疲れているのか、権太郎のデカチンを売り出すというどう考えても上手くいきそうにないことを主張し始める。

こうなってしまうとは、多勢に無勢だ。

根来村を愛している権太郎は、村民たちの総意に対して反論することへの遠慮があるためだ。

とはいえ、事は権太郎のデカチンの問題だ。

権太郎はどうか、この状況を回避する方便を考える。

「大体、俺たちは野菜しか売ったことがないでしょう。

チンポなんてどうやって売り出せばいいんですか？」

権太郎の指摘に村民たちが考え込んだ。

言い出しっぺの伝助も考え込むそぶりを見せる。

「そういえば、康孝。

お前はよくインターネットで買い物をしているな」

伝助が康孝に声をかける。

康孝はこの根来村で一番、コンピューターに詳しい人材であり、村役場や村民のかんたんスマホのトラブルなどに対処している。

「ええ、それが何か」

康孝が伝助の問いかけに頷く。

「俺はよく分からんのだが、インターネットというので聞けば、どんな問題も解決するのだろうか？」

権太郎のデカチンの売り出し方については、お前に任せるから、上手い事やってくれ」

インターネットに詳しくない老人らしい雑な発想で、伝助が康孝に難題を押し付ける。

「そうだな、コンピューターに詳しい康孝なら、何とかしてくれるだろう」

「康孝は、この間も私のスマホを直してくれたしねー」

「康孝、どうか、権太郎のデカチンを売り出しておくれ」

村民たちも次々と康孝に難題を押し付ける。

「分かりました。

最善を尽くします」

康孝が、村民たちに頼りにされる若者としては満点の、そして、実際にデカチンを売り出

さなければならぬ権太郎にとっては最悪の返答をした。

「それでは、俺は早速、権太郎と打ち合わせをするので、先に失礼しますよ」

「おお、任せたぞ」

「この村の未来はお前たちにかかっているからな」

「期待しているわ」

村民たちが康孝に期待を投げかける。

「それじゃ、行くぞ、権太郎」

「は、はい……」

康孝に肩を叩かれ、権太郎は仕方なく、康孝に続いて寄り合い所を出た。

「村の皆にも困ったものだな」

寄り合い所を離れてしばらくしてから、康孝が権太郎に声をかけてきた。

「権太郎も困っているだろうが、ああまで盛り上がってしまったのは、若造である俺たちが何を言っても焼け石に水だろうからな」

「……そうですね」

康孝の言葉に、権太郎は頷いた。

この根来村は、デカチンを売り出すなんて、突飛な案に村民たちが群がるほど先行きが見えないのだ。

デカチンを売り出す当人である権太郎には迷惑な状況なのだが、そこまで追い詰められている村民たちの気持ちも分かるので、怒るに怒れないのだ。

「とはいえ、何もしないのでは、村長たちも納得しないだろうから、形だけでもやることをやるしかない」

「……」

康孝の言葉に、権太郎は何も言えなかった。

デカチンを売り出されるのは迷惑であったし、そもそも、デカチンを売り出すことが可能なかどうかも分からなかったからだ。

「まあ、そうだな。」

デカチンでからかわれてきた権太郎に、デカチンをそのまま露出しろなんて、俺は言う気はないから、そこは安心していいぞ」

年が離れているとはいえ、兄貴分にあたる康孝の言葉に、権太郎は安心した。

「ありがとう、康孝さん」

「礼を言われるほどのことじゃないさ」

康孝が権太郎に笑顔を向ける。

「村長たちは、権太郎のデカチンを売り出せと言う。」

とはいえ、デカチンにコンプレックスがある権太郎に、デカチンを露出させるのはナシだ。……」

康孝が歩きながら考え込むそぶりを見せる。

権太郎は特にアイデアを出せなかったので、無言で歩く。

しばらくして、康孝が口を開いた。

「そうだな、水着で写真をとるのはどうだ？」

水着なら権太郎のデカチンの大きさを表現できて、かつ、権太郎のデカチンそのものを見せるわけじゃない。

これなら、村長たちの要望と、お前の羞恥心が両立するんじゃないか？」

康孝の言葉に、権太郎は考えてみた。

水着に対して、権太郎はあまり良い記憶がない。

麓の町の中学校や高校では、プールが設置されていたため、水泳の授業があった。

当然、男子は皆、同じ水着を着用する。

それもブーメランタイプの競泳水着だ。

デカチンの権太郎の水着もっこの大きさは想定外のサイズであったため、他の男子生徒に比べて腰のラインが下がってしまい、チン毛がちらりと覗く有様だった。

それが恥ずかしくて権太郎は水泳の授業の前にはチン毛の処理をしていたのだが、権太郎のデカチンをからかうことに余念のない男子生徒たちに、チン毛の剃り跡を指摘され、「デカチンで水着が下がる権太郎」と大声で叫ばれてしまったのだ。

だから、権太郎は水着もできれば着たくない。

けれど、村長たちの「権太郎のデカチンを売り出す」という要望の前では、妥協する必要がある。

嫌だ嫌だ、で何もしなかったら、村長をはじめとする村民たちがせつついてくることは目に見えているからだ。

デカチンそのものを見せるわけではないし、まあ、我慢すべきだろう。

「分かりました」

権太郎は康孝の提案に賛同した。

「権太郎は水着を持っているのか？」

「高校の授業で使っていた競泳用水着ならあります」

権太郎は康孝の問いに答えた。

公共プールに行くには、麓の町まで下りる必要がある上、水泳の授業でプールに苦手意識を持つようになった権太郎は、わざわざ公共プールに行く必要を感じなかったため、新たに水着を買う必要がなかったのだ。

「分かった。

それじゃあ水着を持って俺の家に来てくれ」

「はい」

権太郎は康孝と別れ、一度家に帰ることにした。

「お待たせしました」

権太郎は競泳用水着を持って康孝の家にやってきた。

「それじゃ、早速隣の部屋で着替えてくれるか？」

「分かりました」

デカチンにコンプレックスを抱いている権太郎への配慮を自然にする康孝に感謝しながら、権太郎は襖で仕切られた隣の部屋に向かった。

康孝の部屋の隣は段ボール箱が積み上げられて半分ほどが埋まっていた。

康孝はネット通販をよくしているというので、通販の結果貯まった段ボール箱なのだろう、と権太郎は考えた。

権太郎は襦を閉めると服を脱ぎ始めた。

山で山菜やきのこを採取して生計を立てている権太郎の身体は、毎日山を歩いているだけあり、みっちりとした筋肉で引き締まっていた。

もともと浅黒い肌の権太郎は、そのみっちりとした筋肉と合わせて山男の風情を醸し出している。

権太郎はズボンを脱ぎ、青のトランクス一枚になる。

権太郎のデカチンがまさに規格外のサイズであるため、チンポへの締め付けのない下着であるトランクスであるというのに、トランクスの前が盛り上がっていた。

権太郎は青のトランクスを脱いだ。

ぶるるるるるん！

その大きさによって、からかいのネタにされ続けた権太郎のデカチンが露わになった。

権太郎の陰茎は短小チンポの勃起サイズを上回る太さと長さをしており、存在感が桁違いであった。

ピンク色の亀頭はずる剥けで雁首も高く、自己主張の激しい姿をしている。

そして、玉袋は権太郎の陰茎と釣り合いのとれた大胆な姿をしている。

毛の生えている玉袋はどっしりと垂れ下がっており、その中に大きな金玉が二つ収められていることがよく分かる。

大柄な体格の男は、体格との対比によってチンポが小さく見えることが多い。

だが、権太郎のデカチンは権太郎の立派な体格と対比されてもなお、デカチンに見えるごん太であった。

権太郎は己のデカチンを見下ろして、溜息をついた。

中学、高校とデカチンでからかわれ、女子に白い目で見られ続けてきた権太郎にとって、デカチンとは人生の重荷でしかなかったのだ。

本当に、こんなものを売り出すのかと思うと、権太郎は情けなさで涙が出そうになる。

だが、やるしかないのだ。

権太郎はサポーターに足を通した。

そして、サポーターを引き上げデカチンを収めようとするのだが、デカチンが大きすぎて玉袋と陰茎の先端から半分を越えた程度しか、覆うことができなかった。

「……嘘だろ」

権太郎は情けなさで泣きたくなった。

高校生時代はまだ、権太郎のデカチンはサポーターにぎりぎり収まるサイズであったのだ。

それが、まさか、サポーターに収まらないほどのデカチンになってしまっているなんて、思いもしなかったのだ。

権太郎は、己のデカチンを恨めしく思った。

高校生の時にカイボウをされたときは平常時で9.6cmだったのだが、これでは10cmを越えてしまったのだろう。

どうして、権太郎のデカチンは権太郎を苦しめるためのデカくなるのか。

権太郎は己のデカチンを恨めしく思う。

「おーい、そろそろか？」

襖の向こうから康孝が声をかけてくる。

康孝が待っているのだから早く着替えなくてはならない。

権太郎は高校時代の競泳水着である黒のブーメランタイプの水着を取り出した。

そして、水着に足を通し、己のもっこりを収めようとする。

だが、権太郎のデカチンが規格外のサイズであったために、どうあがいてももっこりが収まらない。

規格外のデカチンが水着を前方に押し上げてしまい、チン毛が丸見えどころか、陰茎の根元が露出してしまっているのだ。

それに、水着のもっこり部分では権太郎の存在感溢れる亀頭の形がくっきりと浮いているのだ。

加えて、股の間では前方に大きく押し出された水着と鼠径部の間に隙間ができ、サポーターに覆われた玉袋が覗いてしまっている。

権太郎は反射的に己のデカチンもっこりを両手で覆った。

こんな恥ずかしいものを他人に見せるなんて、恥ずかしくて耐えられないと思ったのだ。

「おーい、権太郎、どうかしたのか？」

襖の向こうから康孝が声をかけてくる。

着替え終わったのだし、兄貴分である康孝を待たせてはいけないという義務感、そして、権太郎のデカチンを売り出すことを求める村民たちの期待に引きずられる形で、権太郎は片手でデカチンもっこりを隠しながら襖を開けた。

「お待たせしました……」

権太郎は片手でデカチンもっこりを隠しながら康孝に声をかけた。

「いや、対して待っていないが、権太郎、とりあえず、股から手を離してくれるか？」

「……はい」

権太郎は渋々己のデカチンもっこりから手を離した。

康孝が真顔になり、権太郎のデカチンもっこりを凝視する。

権太郎は水着を着用しているはずなのに、デカチンを直に見られているかのような心細さを覚えた。

「……高校生の時も、こんな状態で水泳の授業を受けてたのか？」

「そんなことはありません！」

康孝の問いかけに、権太郎は首を振った。

「高校生の時は、ちゃんと収まっていたんですよ！」

「本当です！」

「じゃあ、チンポの成長期が続いている感じか」

康孝が権太郎のデカチンもっこりを凝視したまま、驚いた声を上げる。

「……はい」

権太郎は恥ずかしさに俯いた。

権太郎にとって、デカチンとはからかいの対象であり、女子たちに白眼視される原因でし



がなく、自慢に思うことなどできないのだ。

「そっかー」

康孝が権太郎のデカチンもっこりから目を離し、権太郎の目を見つめた。

「権太郎には悪いんだがな、権太郎がうちに来るまでの間に、村長から電話があつてさ。

権太郎のデカチンの売り上げはもう始めたか、って聞かれたんだよ。

インターネットは光の速さで問題が解決するんだろう、と来たよ。

だから、準備に時間をかけていますって返事したんだけどさ」

康孝が溜息をついた。

「あの様子じゃ、村長たちは明日にも結果を聞いてくると思うんだよ。

つまり、権太郎のデカチンを隠せるだけの水着を買ってくる暇がないんだよ。

あの様子じゃ、村長たちは、水着が合わないのならデカチンそのものを見せつけなければいいって言いだしかねないしな」

申し訳なさそうにしている康孝の言葉に、権太郎は退路を断たれたことを悟った。

村長たちがそんなに権太郎のデカチンに期待をしているのなら、失敗するにしてもさっさと結果を出さなければならないのだ。

「……だからまあ、その、亀頭の形とかが出ている状態を撮影するのは心苦しいんだが、我慢してくれるか？」

兄貴分である康孝の苦悩している様子に、権太郎は、康孝が権太郎の羞恥心に配慮してギリギリまで村長と交渉をしてくれたのではないかと推測した。

兄貴分である康孝にここまで苦勞してもらった以上、権太郎も応じるしかないだろう。

「分かりました。

撮影をお願いします」

権太郎は、水着に亀頭の形が浮かび上がるデカチンもっこりを配信される覚悟を決めた。

康孝のパソコンのディスプレイいっぱいには権太郎のデカチンもっこりが並んでいる。

画像という形で客観的に己のデカチンもっこりを見た権太郎は、恥ずかしさで逃げ出したくなった。

正面から撮影されたデカチンもっこりは、デカチンの圧力と存在感に競泳用水着が変形し、もっこり部分に亀頭の形が浮かび上がっている様子や、腰のラインが大きく下がり、チン毛どころか陰茎の根元まで見えてしまっている。

側面から撮影されたデカチンもっこりは太い陰茎と大きな玉袋による落差がくっきりと見えており、競泳用水着が性器を覆い隠す役割を殆ど果たせていないことが丸わかりであった。

その上、水着と鼠径部の間に隙間ができており、サポーターに覆われた玉袋が覗いている。

接写された画像ではサポーターから玉袋の毛が飛び出しているのさえ確認されている。

権太郎の尻側から撮影した画像もまた、権太郎にとって恥ずかしいものであった。

デカチンもっこりに気を取られていて、着替えたときには気がつかなかったのだが、デカチンもっこりに生地が引っ張られているせいで、尻の割れ目が半分近く見えてしまっているのだ。

その上、太ももの間から見えるデカチンもっこの後ろ姿は、競泳用水着に押し込まれてもなお、存在感を主張するデカ金玉のシルエットが見えるほどなのだ。

権太郎としては、こんな居たたまれない画像を配信するのは止めてほしい。

だが、結果を出すことを急かす村長たちのことを考慮すると、競泳用水着のデカチンもっこりを晒すことは、デカチンそのものを晒すことよりはマシだと妥協するしかなかった。

「それじゃあ、この画像をアダルト向け支援サイトに投稿するぞ」

「……はい」

康孝の言葉に、権太郎は頷いた。

「まあ、アダルト向け支援サイトの登録者は多いし、水着の画像程度で収益が出るわけがない。

村長たちが諦めたら、画像を削除するから、しばらくの間辛抱してくれ」

「分かりました」

康孝の説明に、権太郎は頷いた。

「じゃあ、隣の部屋で着替えてくれ」

「ありがとうございます」

康孝に促され、権太郎は再び隣の部屋に行き、襖を閉めた。

権太郎は己のデカチンもっこりを見下ろした。

水着と腹の間に隙間ができていて、陰茎が僅かに覗いていることに溜息が出た。

本当に、どうして権太郎はこんなデカチンをぶら下げる羽目になってしまったのか。

己のデカチンを恨めしく思いながら、権太郎は競泳用水着を脱ぎ始めた。